事例No.	1293
公表年度	R1
団体の属性	一般市
団体名	茨城県つくば市

事例区分	地域活性化

タグ	・関係人口

事例種類	関係人口

事例内容・タイトル

Tsukuba STEAM Building

出典

関係人口創出・拡大事業（裾野拡大型・裾野拡大（外国人）型）成果報告会

1.地域概要・地域課題・事業に取り組む背景

地域の概要

地域名：茨城県つくば市
人　　口：約24万人

- 研究学園都市であり、国と民間合わせて約150の研究機関が立地し、約1万人の研究従事者が在勤している。
- 2005年につくばエクスプレス（以降「TX」という。）が開業し、沿線では人口が増え続けている。
- 主要産業は、「卸売業、小売業」、「学術研究、専門・技術サービス業」。



解決したい地域課題

- 市内のうち人口が増加している「TX沿線地区」は高齢化率4.4%、合計特殊出生率は2.27と、国内でも出生率が高く、若手世代が多く住む街となっている。
- 一方で、TX沿線地区以外のほとんどの地域（周辺市街地）では、高齢化率は22～37%、出生率は0.97～1.56となっており、過疎化と高齢化が進んでいる。

本事業に取り組むに至った背景

- 周辺市街地は、街並み、食品・農産物などローカルの魅力は潜在するものの、認知度の高い観光資源を持たない地区が多い。
- 市は平成29年度に「周辺市街地振興室」を設置、周辺市街地に足を運ぶ新たなきっかけづくりや、持続可能な地域コミュニティの構築に向けて、地域の有志による活動の支援や活性化プランのコンペなどに取り組んでいる。
- その中でも「地域資源を活かす」「地域の人たちが企画を立てやすい」「誰でも参加しやすい」コンテンツが好評であり、こうした地域の魅力発信手段の新たな切り口として、「ご当地スポーツづくり」に着目した。

2. 事業概要

●事業概要

＜ターゲット＞
- 立教池袋中学校・高等学校数理研究部
- 慶應義塾大学商学部牛島ゼミunispoプロジェクト・利賀プロジェクト
- 筑波大学バーチャルリアリティ研究室

＜概要＞
研究機関が集積する特徴を生かし、多様な研究者とともに、都市住民、市内外の中高生・大学生がご当地スポーツを創作・披露し、一般の方が楽しめる体験型イベント「Tsukuba STEAM Building」を実施。

＜実施事項＞
●アイデアソン　@つくば駅前コワーキングスペース「up Tsukuaba」
第1回　2019年12月12日（木）
第2回　2020年1月18日（土）
●チームビルディング
Slack上に参加者5チーム（市民、研究従事者、筑波大生、立教池袋高校生、慶應大生）のグループを作成。
●ご当地スポーツ体験会
2020年2月2日（日）　@つくば駅前つくばセンター広場

●地域の理想の姿

- インクルーシブな「ご当地スポーツ」が周辺市街地の地域コミュニティはもとより、市内の学術研究機関、医療福祉施設などに普遍的に存在。
- 「ご当地スポーツ」を契機に、関係人口が継続的につくば市へ足を運び、周辺市街地等の振興に関与する余地を新たに創造すること、移住・定住先の候補となることにつながる。

●理想を実現するための本年度事業の位置づけ

地域の人だけでなく、先駆的な取組に関心のある関係人口を巻き込んでいく土台となる関係案内所の構築、関係案内人の確保、そのコミュニティを形成するベースとなるコアメンバーを集め、チームを作ることが本事業の大きな目的である。

●本年度の目標

- つくばにゆかりの研究従事者を関係案内人と位置付け、関係人口の掘り起こしを図る。
- 事業に関わった地域の人と関係人口が継続的な関係を構築するため、「チーム」を編成し、次年度以降の取組の礎とする。



3.事業実施体制・スケジュール

●事業実施体制（受け入れ体制を含む）

- 合同会社for here
  ・関係案内所
  ・つくば駅前において、コワーキングスペース「up Tsukuba」の運営、Webメディアの運営、イベント企画運営の事業を行っている。
  ・本事業において、①全体的なディレクション、②コワーキングスペース利用者（研究従事者、スタートアップ企業など）に対するイベントへの参加周知、③東京圏のコワーキングスペースと連携し、学生等へ参加周知、④SNSを利用した情報発信を行う。
- 筑波大学バーチャルリアリティ研究室　岩田洋夫 教授（日本バーチャルリアリティ学会（VR学会）会長）
  ・関係案内人（立教池袋中学校・高等学校数理研究部をご紹介いただいた）
  ・VR学会が2月2日「VRの日」に開催するイベント「VR運動会」と連携する。
- 産業技術総合研究所　江渡浩一郎　氏
  ・関係案内人（up Tsukubaのコミュニティにも所属し、企画の構想段階で岩田教授をご紹介いただいたほか、スポーツ共創に関わる関係者やキーパーソンをご紹介いただいた）
- 一般社団法人世界ゆるスポーツ協会
  ・「ご当地スポーツ」を考えるアイデアソンのディレクション、コンサルティング、個別スポーツのディレクション、イベント立ち会い

●スケジュール

- 当初計画に比べて、企画づくりや委託手続、筑波大学やその他事業協力者との調整に時間を要し進捗は若干遅れたが、予定通り2月2日（日）に「ご当地スポーツ」体験会を開催した。

●報告時点の最新スケジュール

	実施事項	5月 上	5月 中	5月 下	6月 上	6月 中	6月 下	7月 上	7月 中	7月 下	8月 上	8月 中	8月 下	9月 上	9月 中	9月 下	10月 上	10月 中	10月 下	11月 上	11月 中	11月 下	12月 上	12月 中	12月 下	1月 上	1月 中	1月 下	2月 上	2月 中	2月 下	3月 上	3月 中	3月 下	目標の達成状況
1	委託契約締結									→	→					→	→	→																8月19日 委託契約締結 10月15日 再委託契約
2	募集広報 参加者募集															→	→	→	→	→	→	→	→	→	→										広報紙（10月号）にイベント実施の旨掲載 HP更新 11月17日 サイエンスアゴラ視察
3	アイデアソンの開催																						12/1 1★			1/18 ★									アイデアソンを2回開催 12月12日 アイデアソン（第1回） 1月18日 アイデアソン（第2回）
4	イベントの開催																												2/2 ★						2月2日　イベント開催 VR学会主催のイベントと連携
5	成果分析（報告書作成等）																											→	→					2月上旬　成果分析、とりまとめ

4.事業の「ターゲット」

●事業のターゲット

当初、関係人口を東京圏在住の科学技術やSTEAM教育に関心を持つ層をターゲットとして想定していたが、第1回アイデアソンの実施にあたり当該ターゲットの集客に苦慮したことから、以下の3団体を関係人口として選定した。

- 立教池袋中学校・高等学校数理研究部
- 慶應義塾大学商学部牛島ゼミunispoプロジェクト・利賀プロジェクト
- 筑波大学バーチャルリアリティ研究室

●参加者募集のターゲットの設定経緯

・立教池袋中学校・高等学校数理研究部
IVRC2019で「観客大賞」を受賞。関係案内人の岩田洋夫教授にご紹介いただいた。
・慶應義塾大学商学部牛島ゼミunispoプロジェクト・利賀プロジェクト
富山県利賀村の「ゆるスポーツ」として「アブウド採らず」を創作。スポーツ監修を務めた一般社団法人世界ゆるスポーツ協会の澤田智洋氏にご紹介いただいた。
・筑波大学バーチャルリアリティ研究室
卒業後、研究者として残る学生以外、ほとんどの学生が市外に就職してしまうことを踏まえ、地元筑波大学生も将来的な「関係人口」としてみなしている。

●ターゲットへの広報・アプローチ

【実施事項】

- 市内の小中学校・高校、研究機関、市関連施設、インキュベーション施設へのチラシ配布
- JOIN、ふるさと回帰センターへのチラシ配布
- TX全20駅へのチラシ設置
- 市プロモーションサイト「TSUKUBA TOMORROW LABO」への掲載
- 市の広報紙、市HP、市公式Facebook「つくばファンクラブ」への掲載
- プレスリリース・ニュースリリース配信サービス「PR TIMES」への掲載
- つくば市記者会へのプレスリリース
- 「合同会社for here」のネットワークを活用した広報(Facebook, Twitter,note)
- 常陽リビング（地域情報誌）への広告記事掲載

【成果・効果】

- 参加者は関係案内人や関係案内所の人的ネットワーク経由で募った方が主体となった。チラシやSNS上の告知だけでは数が集まりにくく、どのような取組をしているのかということを写真や動画等でビジュアル的に説明しないと集客が難しかった。
- 一方、ご当地スポーツ体験会の周知においては、広報紙、アイデアソン時の動画・写真を用いたSNS等、そして特に市内の小・中学校全生徒に配布したチラシの効果が非常に高く、すぐに定員の100名に達したため、事前申込みを締め切った。

5.関係人口の活動内容

●参加者（関係人口）が取り組んだ活動の内容

＜アイデアソン（第１回）＞
【日程】2019年12月12日（木）18:00～21:00
【場所】up Tsukuba（つくば駅前コワーキングスペース）
【参加者】30名（※関係人口２名、地元小学生１名が参加）

17:30 ～ 18:00	開場
17:30 ～ 18:50	名刺交換・アイスブレイク
18:50 ～ 19:00	90sec プランピッチ
19:00 ～ 19:10	関係人口創出の説明
19:10 ～ 19:30	オリエンテーション、ゆるスポーツ体験 （一般社団法人世界ゆるスポーツ協会　澤田智洋氏）
19:30 ～ 20:30	チーム分け、グループワーク
20:30 ～ 21:00	プラン発表、フィードバック

＜アイデアソン（第２回）＞
【日程】2020年１月18日（土）14:00～17:00
【場所】up Tsukuba（つくば駅前コワーキングスペース）
【参加者】30名（※関係人口12名、地元小学生１名が参加）

13:30 ～ 14:00	開場
14:00 ～ 14:10	２月２日（日）当日の説明
14:10 ～ 14:35	ゆるスポーツ「アブウド採らず」体験
14:35 ～ 14:45	関係人口創出の説明
14:45 ～ 15:00	各チーム進捗報告
15:00 ～ 15:40	グループワーク
15:40 ～ 16:00	中間発表
16:00 ～ 16:40	グループワーク
16:40 ～ 17:00	最終発表

＜ご当地スポーツ体験会＞
【日程】2020年２月２日（日）13:00～17:00
【場所】つくばセンター広場、つくばセンタービル内部、
up Tsukuba
【来場者】約300名（「参加同意書」提出者141名）
【運営スタッフ】約50名（※関係人口22名、地元小学生１名を含む）

13:00 ～ 13:30	受付
13:30 ～ 14:00	開会式 市長あいさつ 選手宣誓 ラジオ体操
14:00 ～ 16:45	各種スポーツ体験
16:45 ～ 17:00	閉会式











6.活動の成果

●本年度の目標達成状況

- 事業の企画づくり、関係人口へのアプローチに苦心したが、関係人口約20名と地域の有志約40名とともに「ご当地スポーツ」を複数種目、創作することができた。
- 「ご当地スポーツ」の創作プロセスを通じて、今後も関係を続けていきたいと思えるチーム作りができた。
- アイデアソンに市内の中心市街地、周辺市街地の人も参加しお互いの交流は生まれたものの、促進とまではいかなかった。

●関係人口の地域との関わり方

参加者アンケートでは、今回の事業は楽しみながら取り組むことができ、今後同様の企画があった場合は参加の意向を示す前向きな声が数多く上がった。

Qご当地スポーツづくりにこれからも関わりたいと思いますか？（n=18）（複数回答可）

・積極的にかかわってみたい	38.9%
・機会があれば関わりたい	55.6%
・タイミングが合えば関わりたい	38.9%
・内容によっては関わりたい	5.6%
・あまり関わりたいとは思わない	0%

Q 今回結成したチーム、もしくはメンバーで引き続きコミュニケーションをとったり、何か別のことをやってみたいと思いますか？（複数回答可）

・思う	33.3%
・タイミングや内容によってはやってみたい	72.2%
・思わない	0%

●その他の成果

- 今回参加した、都内の高校生や筑波大生のVRチームは、作品を発表する場が少なく、より多くの人に体験してほしいという思いを持たれていた。こうしたニーズを捉え、つくばのご当地要素をアイデアソンなどを通じて関心を持っていただき、VR作品に入れ込むことで、彼らにとっても作ったコンテンツが社会的に直接貢献するという体験を初めてしていただけたのではないかと考えている。
- VRを初め、ITを活用した中高生・大学生の取組は、つくば市内ではもともと進んでいる。今後は都内の生徒や学生とのご当地スポーツづくりを通じた交流もできそうだという手ごたえも得られた。

7.課題への対応

●事業で直面した課題とその対応策･解決方法

＜「スポーツと科学」というテーマで、関係人口・地元の人を継続的に巻き込むような取組に発展させられるか＞

- 関係案内人や世界ゆるスポーツ協会をはじめ、様々なステークホルダーと対話を重ねて、意見交換を進める中で、「ご当地スポーツ」というテーマであれば、周辺市街地における少子高齢化対策においてもわかりやすく、活用しやすく、そして関係人口にも力を借りやすく、関わりやすい構図ができるのではないかという考えが見えてきた。
- 関係案内所を中心とした取組とする上で、世界ゆるスポーツ協会のノウハウや、VRコンテンツをそのまま持ってくるだけでは、うまくはいかないことも進行する中で実感していた。こうした点を関係案内所やつくば市の事情や状況を踏まえて、柔軟に良い所を取り入れながら、事業を推進することができたのは幸いであった。

●今後の課題と対応方針

- 早めのスケジュールでもっと準備期間をとることができれば、競技の数やさらなる関係人口を呼ぶことができたかもしれない。しかし、今回が初回であり、反省点を今後の取組に生かしていきたい。

8.将来への展望

●来年度以降の関係人口とのかかわり方

- つくば市では周辺市街地8エリアの活性化を目指す地域活性化事業が継続する。例えば、こうした地区でそれぞれ「ご当地スポーツ」をつくったり、地区対抗で運動会のようなイベントをすることで、市内各地区の横の連帯感や繋がりを醸成することができれば理想的と考えている。
- 関係人口とする都内中高・大学生のニーズもくみ取り、つくば市に関わりたいと思っていただくために丁寧にコミュニケーションをとっていく必要がある。つくば市を表現の場として活用していただいたり、新たな出会いや学びや気づきにつながる機会があれば、ご当地スポーツづくりに関わらず、コラボレーションを図っていきたい。

●「関係人口」施策の展望

- つくば市は、全国各地から学生や転勤者などが集まっており、出身地側の視点で関係人口が多い都市でもある。また、こうしたことを背景に、ふるさと納税制度においては、市外への寄付が市内への寄付を大きく上回っている状況（2018年度約5億円の収支マイナス、茨城県内ワースト1）となっており、税収面でも大きな課題となっている。
- 周辺市街地の課題解決に資する新たな魅力発信手段の構築を一つの目的として、今回の事業を実施したが、つくば市としては、ふるさと納税制度における課題についても、抜本的な改善を含めて関係人口に関する取組を強化していく必要があるものと認識している。
- その上で、例えば、年間の転出入者の多さに着目し、今回のように中学・高校生・大学生といった将来世代、教育に関心を持つファミリー層などを対象とした施策を検討していきたい。